

ハワイの神々

1820年にプロテスタントの宣教師がやってきた時、ハワイはカブ制度の廃止に伴い一種の宗教的真空状態にあったが、だからといってハワイ人の伝統的な世界観が失われていたわけではない。彼らの宗教文化が簡単に消え去ることがないのは、彼らが彼らの流儀でキリスト教を自分たちのものとしていったことから明らかだろう。ここでは、連載の所々で触れたものも含め、ハワイ人の伝統的な宗教世界について解説しておきたい。

創世神話に出てくる重要なアクア（神）が、カーネ、クー、ロノ、カナロアである。創造神カーネは、生命、太陽、水を司り、カーネホアラニ（天空の神）やカーネヘキリ（雷神）など、70以上の神名があると言われる。クーは戦いの神で、儀式に際して生け贄を必要とし、やはり多くの神名を持つ。カメハメハ大王の守護神もクーで、その名はクーカイリモク（土地を強奪する神）であった。ロノは平和と豊穡の神であり、マカヒキ（収穫祭）を司る神として知られる。海の神であるカナロアは、他のポリネシアの島々ではタンガロアと呼ばれる重要な神であるが、ハワイではキリスト教が入ってきた当初は悪魔と見なされた。これらの神々は、サトウキビ（カーネ）、フクロウ（クー）、サツマイモ（ロノ）、タコ（カナロア）といった他の動植物など、「キノ・ラウ（“多くの身体”）」を持つとされる。

ハワイにはその他にも多くの神々がいる。ポリネシア全域で知られる英雄神のマーウイは、空を持ち上げたり、島を釣り上げたり、太陽の運行を遅らせたりしたトリックスターである。遙か南のカヒキから兄弟姉妹と共にハワイに移り住み、ニイハウ島、カウアイ島、オアフ島と住処を求めて穴を掘り続け、最後にハワイ島のキラウエア火山に居を構えた火山の女神ペレ。フラの女神であるラカや半神半人のブタの男神であるカマプアア。これらの神々にも多くの伝説がある。

ハワイの伝統的宗教世界

神話や伝説の中に登場する神々とは異なり、人々にとってより身近な存在の神が、アウマクアと呼ばれる祖先神である。ほとんどのアウマクアはもとは人間であって、死後、彼らはアウマクアの世界に属しながら、子孫を見守っていると信じられている。彼らは、夢の中で忠告や助言を送ったり、人が起きる時には何らかのサインによって警告したりすると言われる。アウマクアは、父方、母方のどちらからでも受け継ぐことができ、一人で複数のアウマクアも持つこともできるが、義務を果たさなければその関係を維持できない。

アウマクアの代表的なものに、サメ、ヤモリ、フクロウ、カメ、女神ペレ、虹などがある。アウマクアは祖先神という点でトータルを連想させるが、同じアウマクアを持つ人たちが外婚集団を形成することはなかった。今日もハワイ人の多くは自分の家系のアウマクアが何であるか知っており、彼らの間でアウマクアにまつわる不思議な体験が語られることは珍しくない。だが、実際にアウマクア信仰を保持している人（義務を果たして関係を維持している人）は少ないと考えて良いだろう。

ハワイの伝統宗教を代表するものとして、しばしばアウマクアと並んで取り上げられるのが、カフナである。カフナとは、

一般に宗教的職能者のことを指す。古代のハワイでは、首長のアドバイザーである神官や預言者、クーヤロノのヘイアウ（神殿）での儀式を司る祈祷師など、いわゆる位の高いカフナがいた。一方、民衆の中で活動する呪術師や民間医療師もカフナと呼ばれていた。今日、「カフナ」と言えば、民間のカフナを指すことが多い。彼らはウニヒビリ（靈魂）やアウマクアの力を借りて目的を達成することができると信じられている。

神話に登場し首長の祖先とされる神々、伝説で語られる半神半人の神々、子孫を見守る祖先神。これらの神々の間に階層関係があることは確かだが、あらゆる神がキノ・ラウを持つため、その境界は時として曖昧なものになる。例えば、ロノ神のキノ・ラウには、ブアア（ブタ）、フムフムヌクヌクアブアア（ハワイの州魚）、半神半人のカマプアアなどがあり、これらのキノ・ラウをアウマクアとするハワイ人がいるのである。大きな神も小さな神も入り交じって存在しているというのが、ハワイ人の伝統的な宗教世界と言えらるだろう。

遍在するのは神々だけではない。マナ（霊的・超自然的な力）も生物にとどまらず全ての事物に宿っていると考えられた。世界は神々とマナに満ちており、そのような世界の中で自然も土地も捉えられる。ハワイの伝統的宗教体系であったカブ制度も、首長に備わるマナや自然界に満ちているマナが衰えるのを防ぐためのシステムであった。

二つの文化

カブ制度が放棄されていたとはいえ、このような世界観を持つハワイ人に宣教師はキリスト教を広めようとしたわけである。19世紀前半に出会ったハワイ人の文化と宣教師のキリスト教文化を異なる二つの文化として捉えれば、そこには口承文化と文字文化、多神教と一神教というように、相対する特性を指摘することはできるだろう。また、土地や自然環境に対する両者の考え方や態度も際だって相対するものであった。

もちろん二つの文化には、「アロハ」と「愛」、「オハナ」と「家族」というように、類似する概念もあった。しかし、オハナが人間の家族だけでなくアウマクアを、すなわちサメ、ヤモリから虹に至るまで全ての事物を含み、アロハがそれら全ての事物に対して向けられるのに対し、キリスト教の家族に含まれるのは人間までであって、博愛や隣人愛もあくまで人間しか対象としない。ハワイ人の「アロハ／オハナ」とキリスト者の「愛／家族」は似て非なるものであったと言える。だが、似ているが故に二つの文化の近似性が強調され、これらのキリスト教概念は比較的容易にハワイ文化の中に移植されることとなった。

このように二つの文化を並べて考えることはできる。しかし、ハワイの伝統文化についての我々の知識の多くが、宣教師に教育を受けたキリスト教徒のハワイ人学徒によって残されたものであることに留意しなければならない。また、「宗教」や「信仰」という概念もキリスト教起源のものであるということにも注意が必要だろう。アウマクアやマナといった事象や概念をハワイ人の「宗教」と一括りにする時、ある種の違和感が感じられるのも、無意識のうちにキリスト教の言葉で彼らの世界を言い表そうとしているからに他ならない。